

8/31 2009



Japan Music Education Society News Letter

第37号

No. 37

日本音楽教育学会ニュースレター

目 次

1 報告・お知らせ

- 1-1 役員選挙結果報告2
- 1-2 編集委員会からのお知らせとお願い4
- 1-3 日本音楽教育学会第40回大会のご案内(3)6
- 1-4 韓日合同音楽教育セミナー(韓日合同ゼミナール) 第二次案内8

2 海外トピックス

- 2-1 APSMERの15年をふり返って(村尾忠廣)10

3 新刊紹介

- 3-1 サウンド・エデュケーション(新版)(今田匡彦)13
- 3-2 地球音楽の喜びをあなたへ(降矢美彌子)14
- 3-3 DVD・こどもとおとなへの音楽の贈り物(降矢美彌子)15
- 3-4 日本民謡における拍の伸び縮みと聴取に関する研究(松本晴子) ...16

4 事務局より

- 4-1 お知らせ17

編集後記

1 報告・お知らせ

1-1 役員選挙結果報告

平成21年7月25日

第19期日本音楽教育学会会長選挙結果報告

日本音楽教育学会会員各位

日本音楽教育学会選挙管理委員会

委員長 細田 淳子

第19期日本音楽教育学会会長選挙の結果を下記の通り報告いたします。

尚、これは再投票による結果です。

記

有権者数：1,311

当選者（得票数）	次点者（得票数）	総票数（票）	投票率（%）
(160) 加藤 富美子	(110) 吉田 孝	443	33.8

総投票者数 438票（内 白票 5 無効 0）

日本音楽教育学会選挙管理委員会

委員長 細田 淳子

副委員長 志民 一成

委員 小畑 千尋

〃 中地 雅之

〃 山下 薫子

平成21年7月25日

第19期日本音楽教育学会理事選挙結果報告

日本音楽教育学会会員各位

日本音楽教育学会選挙管理委員会
委員長 細田 淳子

第19期日本音楽教育学会理事選挙の結果を下記の通り報告いたします。

記

有権者数：1,312

地 区	当選者		次点者	総票数（人）	投票率（%）
北海道	寺田貴雄		尾藤弥生	18/47	38.3
東 北	今田匡彦		水戸博道	30/74	40.5
関 東	有本真紀	坪能由紀子	八木正一※	146/553	26.4
	今川恭子	筒石賢昭			
	島崎篤子	山本幸正			
	阪井 恵※	西島 央※			
北 陸	後藤 丹		伊野義博	13/66	19.7
			齊藤忠彦		
			篠原秀夫		
			中山裕一郎		
東 海	南 曜子	新山王政和	北山敦康	41/114	36.0
近 畿	杉江淑子	奥 忍	岩井正浩	52/184	28.3
	田中多佳子		菅 道子		
			若尾 裕		
中国四国	三村真弓	小川容子	吉富功修	72/151	47.7
九 州	木村次宏	津田正之	菅 裕	34/123	27.6

※関東地区は7位が3名同点であったため、理事選挙実施要領6(3)に基づき、選挙管理委員会において厳正な抽選により2名を当選者と決定した。

総投票者数 406票（内 白票 6 無効 1）

投票率 30.9%

日本音楽教育学会選挙管理委員会
委員長 細田 淳子
副委員長 志民 一成
委員 小畑 千尋
〃 中地 雅之
〃 山下 薫子

1-2 編集委員会からのお知らせとお願い

編集委員会委員長 権藤敦子

1. 『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』各1号が発行されました

6月30日に発行された『音楽教育学』第39巻第1号は、延べ150名を超える方々のご参加とご協力を得て完成しました。皆様のおかげで、2本の投稿論文、会員による文献リスト、各地区でまとめていただいた例会報告に加えて、異なる立場の方々にご執筆いただいたピッチマッチに関する3本の研究動向、2本の書評を掲載することができ、大変ありがたく思っております。

また、このニュースレターとともに『音楽教育実践ジャーナル』vol.7 no.1 (通巻13号)を皆様のお手元にお届けしました。2名のエディターを中心に企画・編集をしてきましたが、おかげさまで「読譜」に焦点をあてた興味深い論考を多数お寄せいただき、多様な視点から読譜指導のあり方を考えることができるものとなりました。できたてのジャーナルにぜひお目通しください。

今年度上半期の2誌を無事発行できましたことに感謝し、お力添えをいただいた多くの方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

2. 『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』にご参加ください！

本学会の目的に立ち返ってみれば、音楽教育研究を振興し、会員各位の研究活動や交流に寄与できる学会誌とは、音楽教育の情報や研究の刺激に満ち、会員自らがさまざまな形で雑誌づくりに参加できるような、そんな雑誌であろうと思います。編集委員会では、それぞれ個性的な顔をもつ学会誌『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』2誌の特徴を生かし、次号を楽しみにしていただけるような雑誌づくりを心がけつつ、会員各位が投稿しやすい環境整備を進めています。ぜひ、皆様の原稿をお寄せください。1500名を超える学会員が直接手にとって見ることのできる、交流の場としての学会誌にご参加ください。

『音楽教育学』には、公表し交流をしたい内容に応じて、多様な投稿の種類

があります。たとえば、修士論文や博士論文等でじっくりと取り組まれた成果を広く学会員に公表したり、音楽教育の現場から実践に関する研究論文・報告を発信したり、長期にわたって深めて来られた研究テーマについて俯瞰的な研究動向をまとめる機会にされたり、是非紹介したい新刊書について書評や書評論文としてご執筆いただいたり、等々、積極的なご投稿をお待ちしています。

『音楽教育実践ジャーナル』では、毎号、編集委員会から特集テーマを提案して会員からの投稿を募集しています。一つのテーマをめぐって、異なる立場からの論考、海外も含めた異なる地域の報告、授業やレッスンなど実践場面での具体的な事例等、興味深い原稿をこれまでも多数お寄せいただきました。会員がともに円卓を囲んで同じ問題を考えるラウンドテーブルのような雑誌であり、あわせて、特集以外に自由投稿もできます。

次号『音楽教育実践ジャーナル』vol. 7 no. 2（通巻 14 号）のテーマは「学校器楽教育の過去・現在・未来」です。原稿締切は 9 月 15 日となります。特集の趣旨と投稿の方法については、『音楽教育実践ジャーナル』vol. 7 no. 1 巻末、および、学会ホームページに掲載したお知らせをご覧ください。

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/article/pdf/article11.pdf>

また、来年度 8 月発行となる vol.8 no.1（通巻 15 号）のテーマは、決まり次第学会ホームページに掲載の予定です。

3. ホームページに論文募集のメニューができました

7 月 1 日に学会ホームページがリニューアルされ、学会誌への投稿時に参考となる情報が簡単に入手できるようになりました。『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』にわけて、投稿規程、執筆の際に使う書式、投稿時に同封する別紙、投稿の手引き等をご参照いただけるようになっています。また、投稿原稿の査読時に確認しているポイントも公開しています。ご活用ください。

* 次回編集委員会は 10 月 2 日（金）の予定です。

1-3 日本音楽教育学会第 40 回大会のご案内（3）

大会実行委員長 吉富功修
同 事務局長 三村真弓

皆様、いよいよ日本音楽教育学会第 40 回大会が近づいてまいりました。

このたびの大会には、研究発表数 103、共同企画 2 の申し込みをいただきました。非常に多くの方々に発表していただけることを、心から感謝しております。発表数が多くなりましたために、当初予定しておりました大会日程を下記のように変更せざるを得なくなりました。1 日目と 2 日目の研究発表終了時間が 30 分遅くなり、2 日目の研究発表開始時間が 30 分早くなっておりますので、お気を付けください。なお、これに伴い、2 日目の大会終了時間も当初の予定より 30 分遅くなっております。遠くからおいでくださる会員の方にはたいへんご迷惑をおかけして申し訳ありませんが、なにとぞよろしくお願いいたします。なお、会場は広島大学大学院社会科学研究科講義棟です（教育学研究科ではありませんのでご注意ください）。

常任理事会企画のプロジェクト研究は、今回は 2 本とも新規の内容です。プロジェクト研究Ⅰのテーマは「唱法再考」です。この古くて新しい話題に関して、公開討論会形式によって活発な意見を交換し、皆さんとご一緒に今一度考えてみようという主旨です。プロジェクト研究Ⅱのテーマは、〈「現代音楽」のゆくえと音楽教育—その可能性を探る—（1）〉です。一般的に受け容れられにくいと思われる「現代音楽」と音楽教育との関係の可能性を、豪華なパネリストによる提案とディスカッションによって探ります。

40 周年記念行事では、元学会長山本文茂氏による講演「40 年の歩み」や、韓国音楽教育学会長ミン・キョンフン氏による記念講演が行われる予定です。また、学会賞の授賞式も行われます。

大会実行委員会企画としては、音楽科の学力ということをテーマに、①平成 10 年度改訂小学校学習指導要領・音楽科に示された音符・休符・記号等の知識の習得状況等についての調査結果報告をもとにした基調提案、②ハンガリーの Pécs 大学 Illyés Gyula 教育学部元副学部長の Pajor Márta 女史による講演を予定しています。Pajor 女史には、現在のハンガリーの音楽教育の現状はどのようなものか、就学前教育・小学校・中学校でどのくらいの音楽的学力の獲得を目指しているのか、大学の音楽科教員養成課程ではどのようなことがなされているのか等について、映像を交えてお話いただく予定です。また、続いて行われる Pajor 女史によるワークショップでは、コダーイの理念に基づいた、幼稚園向けの指導法、小・中学校向けの指導法、大学の音楽授業での指導法等を実践していただきます。

とにかく、盛りだくさんで充実した大会になるようにスタッフ一同がんばっております。会員の皆様の多数のご参加を心よりお待ちしております。またそれと同時に、非会員の方々にも参加を呼びかけただけですと幸甚です。広島大学へのアクセス方法や宿泊情報等、さらに東広島市周辺の観光スポット等については、大会ホームページをご覧ください。

*大会ホームページ

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/music/40thconference/index.html>

1. 大会日程

10月3日(土)

8:45 9:30 12:30 13:30 15:00 15:15 17:15 17:30 18:15 18:30 20:00

受付	研究発表Ⅰ	昼食	プロジェクト研究Ⅰ (B257)	移動・休憩	40周年記念行事 (B257)	移動・休憩	総会 (B257)	移動・休憩	懇親会 (北2食堂)
	A (B255)								
	B (B251)								
	C (B351)		共同企画Ⅰ (B152)						
	D (B159)								
	E (B155)		共同企画Ⅱ (B255)						
	F (B152)								
	G (B157)								
	H (B257)								

10月4日(日)

8:30 9:00 12:30 13:30 15:00 15:15 16:45

受付	研究発表Ⅱ	昼食	基調提案&講演 (B257)	移動・休憩	プロジェクト 研究Ⅱ (B257)
	I (B159)				
	J (B251)				
	K (B257)				
	L (B351)				
	M (B152)				
	N (B157)				
	O (B155)				
	P (B255)				

* 研究発表の打ち合わせは、1日目は9:00から、2日目は8:30から各会場にて行います。
研究発表者と司会者の方々はこの時間に各会場にお集まりください。

2. 大会参加費および懇親会費

会員参加費：4,000円(事前振込)，4,500円(当日)

非会員(臨時会員)参加費：2,500円(1日のみ)，4,500円(2日間)

* 出欠回答はがきは、ご欠席の場合もお出しくださるようお願いいたします。
総会に出席できない方は委任状に必ずご記入ください。

懇親会費：4,000円

3. 昼食その他

両日とも近くの学食は営業していませんが、会場近くのマーメイドカフェが3日(土)は10:00～18:00、4日(日)はお昼休み前後に営業しております。また、お弁当の事前予約も受け付けておりますので、大会参加費とともにお申込みください。

また、大きなお荷物はお預かりいたしますので、受付にてお問い合わせください。

1-4 韓日合同音楽教育セミナー（韓日合同ゼミナール）第二次案内 —韓日両国の音楽教育の現在と未来—

日時 2010年1月9日（土）、10日（日）

会場 建国大学校（大韓民国・ソウル市広津区）

主催 韓国音楽教育学会 共催 日本音楽教育学会

※ 韓国音楽教育学会との協議により、今回の正式名称は「韓日合同音楽教育セミナー」となりました。

■ スケジュール（予定）

1月9日（土）

13:00 14:00 14:30 17:00 18:00 20:00

受付	開 会 式	シンポジウム 研究発表 ラウンドテーブル ワークショップ	移 動	懇親会
----	-------------	---------------------------------------	--------	-----

1月10日（日）

9:00 10:00 12:00 13:00 16:30 17:00

受付	研究発表 ワークショップ	昼 食 休 憩	シンポジウム 研究発表 ラウンドテーブル ワークショップ コンサート	閉 会 式
----	-----------------	------------------	--	-------------

時間は変更になる場合があります。

■ 参加申込

参加費：日本音楽教育学会会員 W70,000 当日会員 W90,000 学部生 W40,000

懇親会費：韓国音楽教育学会の招待により無料となります。

申込期間：2009年10月1日～11月30日

申込方法：9月上旬に日本音楽教育学会ホームページでご案内します。

◆ 発表者募集

1. 発表の種類

A. 研究発表

日本語 (20 分), 韓国語逐次通訳 (20 分), 質疑応答 (10 分)

B. ワークショップ

50 分 (日本語, 韓国語逐次通訳による)

2. 応募〆切 2009 年 10 月 15 日 (木)

3. 応募方法

以下の内容を記し, 電子メールで学会事務局までお送りください。

日本音楽教育学会 事務局 メールアドレス onkyoiku@remus.dti.ne.jp

(1) 発表の種類: A. 研究発表 B. ワークショップ

(2) 発表タイトル: 日本語, 韓国語, 英語の 3 種類を記してください。

(3) 発表要旨 (日本語と韓国語): A4 版 1 頁

- ・ 日本語, 韓国語の 2 種類を作成してください。

- ・ 日本語要旨は 500 字程度とします。

- ・ 日本語要旨の韓国語訳を同頁に含めてください。

- ・ 日韓の互換性の点から, できるだけワード文書による添付ファイルでお送りください。

- ・ 韓国語訳については, あらかじめ各自でネイティブチェックを受けてください。

(4) 発表に使用する言語: 日本語, 韓国語のいずれかを記してください。

(5) 代表者および発表者全員の氏名と所属: 日本語および英語で記してください。

(6) 代表者名および連絡先: 代表者の住所, 電話番号, メールアドレスを記してください。

4. 発表に使用する言語

発表は日本語, 韓国語のいずれかで行なってください。日本語で発表する場合には, 韓国音楽教育学会より韓国語逐次通訳がつきます。韓国語で発表する場合には, 日本語逐次通訳を発表者の方で確保してください。

5. 論文集の作成について

このセミナーでは, 事前に発表原稿を収録した論文集を作成し, 当日配布する予定です。発表原稿を日本語, 韓国語のいずれかで, A4 版 4 頁にまとめて提出していただきます。

〆切は 2009 年 11 月 30 日です。なお, セミナー実施後の報告書は作成しない予定です。

6. 問い合わせ先

日本音楽教育学会国際交流委員長 藤井浩基 (島根大学)

電話 0852-32-6322 メールアドレス kofujii@edu.shimane-u.ac.jp

注) 発表応募の件数が多い場合, 会場や日程等の関係でご希望にそえない場合もあります。
あらかじめご了承ください。

2 海外トピックス

2-1 APSMER の 15 年をふり返って

APSMER 委員長 村尾忠廣

1. APSMER の発足

ISME のリサーチセミナーが名古屋で開催されたのは 1992 年のことであった。大会組織委員長であった私はアジア地域からの参会者を期待していた。しかし、発表者は 25 人に厳選されている。そのためアジア枠は 1 名しかないのである。それで思いついたのが、アジア太平洋地域で 100 名程度のリサーチセミナーを開催したらどうだろうか、ということだった。名古屋セミナーにはオーストラリアから一人の若い研究者が参会していた。このセミナーが国際舞台へのデビューとなった Gary McPherson である。2 年後の 1994 年、アメリカ、タンパで開催された ISME 世界大会で彼と再会した。そこで、アジア太平洋地域のリサーチセミナー（シンポジウム）を始めないか、と提案したのだが、二人だけでこのような大仕事を始めるのは心もとない。アジア地域からもう一人発起人が必要だということで、韓国の Hong-soo Lee を誘い、3 人で話し合って “Asia Pacific Symposium on Music Education Research” を各年に開催することを決定した。今から 15 年前のことである。

2. 第 1 回 APSMER ソウル大会

発足大会は名古屋で開催する予定であったが、私が ISME リサーチ委員

会の委員長として国際大会を運営しなければならなかった。このため、第 1 回大会は韓国、ソウルで 1997 年に開催することにした。この大会を事務局長として実質取り仕切ったのが Myun-soo Auh である。彼女は ISME リサーチセミナーに参加していて、このセミナー独特の合宿形式を APSMER に取り入れた。リサーチ委員会の委員で、当時カナダのブリティッシュコロンビア大学につとめていた R. Walker が大学院の学生を多数連れて参会したことも APSMER 発足に大きな影響を与えた。想定外のことであったが、たしかに、アメリカ、カナダは太平洋に面しているのである。

ソウル大会には香港から多数の参会者があった。その中に、S. Morrison と V. Fung がいた。二人ともその後アメリカに移住し、今や世界を代表する音楽教育研究者である。当時は国際的には無名であっただけにふり返ると感慨深いものがある。

3. 第 2 回タスマニア大会から第 3 回名古屋大会へ

第 2 回のタスマニア大会の実行委員長を務めた Margaret Barrett もソウル大会では初々しい若手研究者であった。今や国際会議の基調講演をもっとも多くこなしている一人である。タスマニア大会は 2 月におこなわれた

ため、日本からの参会者はわずかであったが、遠くフィンランドからも若手研究者が発表した。彼らは APSMER が面白い、と言って次の名古屋大会にも参加したのである。こうして APSMER はアジア太平洋以外の地域からの参会者も受け入れることになった。

第3回 APSMER 名古屋大会 (2001) は、私が ISME 理事に選出された翌年の開催であった。ところが、当時の ISME 会長は財務理事の Gary McPherson を実質上解任し、しかも、APSMER 名古屋大会と同じ時期に「第1回 ISME アジア太平洋地域大会」をニュージーランドで開催すると宣言したのである。実際、ISME という組織を使って大々的に宣伝を開始した。私がどんなにショックを受けたか容易に想像いただけるであろう。が、結果的には心配無用であった。オーストラリア、アジア地域の音楽研究者のほとんどは、ニュージーランドではなく、日本の名古屋で開催された APSMER の方に集まったからである。第1回 ISME アジア太平洋地域大会は、ニュージーランドのローカル大会として第1回をもって終わってしまったことになる。

4. 第4回香港大会から5回シアトル、6回バンコク大会へ

第4回の香港大会 (2003) は、突如勃発した「サーズ」問題でキャンセルが相次ぎ、開催中止さえ検討された。しかし、Gary がシドニーから香港教育大学に転任していたこともあって、何とかこの苦境を乗りきった。次の第5回シアトル大会 (2005) は Gary

が ISME の会長になったことと、イリノイ大学へ移ったことなどを理由として APSMER の運営から一時的に手を引くことになった。そのため、次の大会の決定 (2007 年バンコク大会)、その他のことを私一人で進めてしまったのである。どう考えてもこれはいけない。

シアトル大会の後、私の提案で APSMER の運営組織をつくることにした。メンバーはこれまでの大会実行委員長とアジア地区選出の ISME 理事である。委員長には私が、事務局長は香港教育大学の Jane (Cheung Yung, Wai Ye) が引き受けることになり、香港教育大学に事務局をおいてホームページを開設することになった。“APSMER”という運営組織の発足である。

2007 年バンコク大会にはもう一つ新しい動きがあった。それは、APSMER を残したまま、これを ISME アジア太平洋地域大会としてはどうか、ということである。ISME 会長になった盟友 Gary からの提案であるから、私に反対する理由はない。しかし、2003 年の名古屋大会で「第1回 ISME アジア太平洋地域大会」をぶつけられた嫌な思いがあるだけに、これを受け継いで「第2回」と銘打つことだけはしたくなかった。そのため、バンコク大会は「The 6th APSMER/ISME Asia Pacific Regional Conference in Bangkok」となったのである。

5. 上海大会 (2009) から台北 (2011) 大会、そしてシンガポール (2013) へ向けて

残念ながら今年の上海大会は実行

委員会の運営が目茶苦茶であった。アブストラクトを書いて発表申し込みをしても、受け取りの返事がこない。アクセプトされたかどうかもわからない。繰り返し、問い合わせてもなしの礫。ようやく、アクセプトの返事がきても、今度は大会参加費が送れない。参加費を払い、飛行機の手配まで終えた段階で、突然、フルペーパーは、英語や内容に問題があるからプロシーディングスに掲載できない、というメールがはいる。苦情は出発直前まで私のところに寄せられ、私はその対応に追われた。当然、キャンセルが相次ぐことになる。これで大会ができるのか、といぶかしくも思ったが、大会には300名以上の人が集まっていた。大会初日の私の基調講演は、ホールが満席の人で溢れていたのである。私の講演題目は、「わらべ唄における集団ピッチマッチとキーの収斂プロセス」というもの。すでに、リサーチセミナーで発表していたし、つい、2週間前にも帝塚山大学こども学科開学記念講演会でも発表していたから、どこでどうもってゆけば会場がどよめくか、ということも知りつくしていた。好評だったため、上海音楽院のDanhong Yuから来年3月には5日間の集中講義にきてほしいという依頼をうけた。たまたまこのテーマの発表に自信があったというだけのことなのであるが・・・。

一方、奥忍さんの企画したアジア地区の音楽教科書展示とパネルディスカッションは、台湾との政治的な問題からプログラムにも掲載されていなかった。それで当日会場に張り紙一つ

掲げただけの案内となった。ところが、3時間連続のパネルディスカッションは大入り満員で活発な議論の場となったのである。プログラムにもプロシーディングスにもフルペーパーが掲載された個人発表は、わずか15分で質問、コメントの時間もない。「玉突き状態の発表」であった。聴衆がパネルディスカッションに流れたのは当然というべきだろう。

さて、今回は政治的問題の一つであった台湾で台北大会が開かれる。台湾の人たちは、発表の場を著しく制限された無念さを次の8th APSMER2011 in Taipeiではらそうとしている。台北大会はきっとすばらしい運営をすることだろう。APSMER Boardも大会運営マニュアルを作成してサポートする予定である。

私は今大会でAPSMER委員長を辞することになった。創設以来15年、委員長として4年間務めたことになる。こうした長年の国際貢献が評価されて、このたび香港教育大学から名誉教授の称号をいただいた。光栄なことである。まだ引退するわけではないが、これからは一步退いて音楽を楽しむ研究をしたいと思っている。

新委員長はオーストラリアのMargaret Barrettに決定した。事務局も彼女の勤めるオーストラリア、ブリスベン大学に移籍、開設する予定である。次回APSMERは台北(2011)、その次はシンガポール(2013)の開催が決まっている。今後いつそう発展してゆくことだろう。APSMERの15年をふり返って実に感慨深いものがある。

3 新刊紹介

3-1 サウンド・エデュケーション（新版）

R.マリー・シェーファー著

鳥越けい子，若尾裕，今田匡彦訳

春秋社，2009 年 6 月刊行
全 182 ページ，1800 円＋税
ISBN: 978-4-393-93543-9



日本語版を初版として 1992 年に出版された本書 *A Sound Education* は，その後 7 刷までプリントを続けたが，今回，初版になかった「課題一覧」が新たに設けられ，新版として再出版されることとなった。

著者の R. マリー・シェーファーはカナダを代表する作曲家であり，サウンドスケープ思想の提唱者として知られている。この，シェーファーの造語になる＜サウンドスケープ＞ということばが，（本人の意図とは関係なく）あまりにも多義的，つまり，気の利いたことばだったので，例えば日本では，自然科学，社会科学，芸術という学術分野を問わず，随分と乱暴に，ある意味，アビュースされて来たように，思える。

そして，この，シェーファーによるサウンドスケープ思想を，音楽教育という窓を通して透明に写し取ったのが，『サウンド・エデュケーション』，ということになるのだが，故に，日本では，＜サウンド・エデュケーション＞自体も多義的に扱われ，音楽教育という文脈では，実は，別枠として隔離されて来てしまったようなのだ。訳者のひとり鳥越けい子は＜新版に寄せて＞の中で，「課題としての『サウンド・エデュケーション』には，シェーファーによって開発された課題を直接的に指す『狭義の用法』と，音を通じて身近な環境と自由に豊かな関係を取り結ぶという『サウンド・エデュケーション』によって示された目的のために考案された課題一般を意味する『広義の用法』とがある」と述べている。しかし，優れた思想は，その洗練性に於いてこのような 2 項対立を許さない。サウンド・エデュケーションの本質は，鳥越が「狭義の用法」として幽閉しようとした西洋音楽の広大な宇宙の中に，在る。シェーファーは，このサウンド・エデュケーションを通して，西洋芸術の基盤である *mimesis*（模倣）の伝統に本家帰りすることにより，自然環境と人間，そして音楽との間の本来性を取り戻そうとただけなのだ。シェーファーが今もなお，オーケストラや合唱のために作品を作り続けていることが，なによりそれを証明している。

今回の『サウンド・エデュケーション』新版刊行が，音楽とはなにか，或いは，なにが音楽か，を思考する機会になれば，音楽教育にとっても重要なコントリビューション，となるだろう。

本書についての詳細は以下のサイトにて：

<http://www.shunjusha.co.jp/detail/isbn/978-4-393-93543-9/>

（今田匡彦：弘前大学）

3-2 地球音楽の喜びをあなたへ

—未来の地球市民となる子どもたちのための
多文化音楽教育—

降矢美彌子著

現代図書，2009年2月刊行
全117ページ，税込2,500円
ISBN:978-4-86299-008-2



「豊かな地球音楽を全ての人々の手に」，「音楽で子ども達を本当に幸せにしたい」，このような願いのもとに，日本の多文化音楽教育の活性化のために執筆された。教材化されることの少ないアイヌ，椎葉，竹富島，バリ島の音楽文化について，音楽・文化・生活情報と伝承者からの学習マニュアルが日本語・英語で収録された多文化音楽学習DVDが添付されている。

内容は，始めにアメリカの先行研究からアメリカと日本の状況の違いと共通点を明らかにし，日本における多文化音楽教育の理念や新たな観点をもつ指導法について具体的に提唱している。

筆者の主張は，音楽の学習に際して，音楽をその背景と切り離すことなく背景や人々の暮らしとともに学び，音楽文化を育んだ人々の心情の理解を目指すこと，本来的な伝承方法を尊重すること，異文化は，映像からであっても伝承者から学ぶこと，学習者の音楽文化から出発して，最後に再び自身の文化に立ち返って，学習者の文化的なアイデンティティの確立を目指すことの4点である。

この理念と指導法が，添付の多文化音楽学習DVDを用いた5つの授業設計で具体的に示されている。加えて，日本の子ども達の音楽の世界を豊かに広げるために，日本の民俗音楽から声明，ア・カペラ合唱，ゴスペル・ソング，岡本文弥や平井澄子の現代邦楽，ハンガリーの作曲家クルターグと武満徹を扱った7つの授業提案が示されていて，現場の教員が多文化音楽教育を実践するための具体的な指針が得られよう。多文化音楽教育の実践が飛躍的に広まることが期待される。このような多文化音楽教育によって，多民族共生や平和の実現に音楽教育は幾ばくでも貢献できるのではないかと結んでいる。

注文フォーム：

<http://www1.interq.or.jp/posta/fkc/tikyuuchuumonn.htm>

(降矢美彌子：帝京平成大学)

3-3 こどもとおとなへの音楽の贈り物

バルトーク・ベーラ作曲『児童と女声のための合唱曲集』

ウグリン・ガーボル指揮

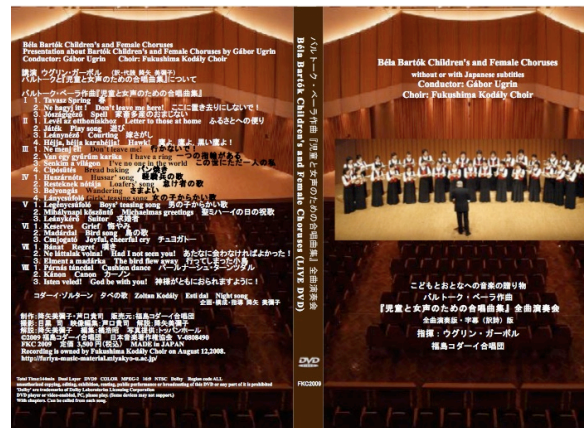
福島コダーイ合唱団

制作：降矢美彌子・芦口貴司

販売元：福島コダーイ合唱団

3,500円（税込）

FKC 2009



1936年に作曲されたバルトーク・ベーラの『児童と女声のための合唱曲集』は、20世紀を代表する児童と女声のための合唱曲の1つと言われている。本DVDに収録された福島コダーイ合唱団による全曲演奏会のチラシに、作曲家の林光は以下の文を寄せた。「この小曲集は、脱・長短調の和声、簡潔のきわみともいえる対位法によって、ハンガリー民族音楽の源流からはるか未来までを一直線に見とおしているかのようだ。」

作品集には、27曲のア・カペラ合唱曲が収められている。それぞれの作品の演奏時間は短く、3分を越える作品はない。しかし、これらの27曲には、子ども時代から青年期までの、人間と自然のあらゆる営みが詠われ、バルトークの多様な作曲技法とあいまって、珠玉の名品となっている。

指揮は、ハンガリーを代表する合唱指揮者ウグリン・ガーボル、演奏は福島コダーイ合唱団。指揮のウグリンと福島コダーイ合唱団は、20年を超える協同の演奏活動を行なっている。福島コダーイ合唱団は、すでにハンガリーを代表する女性合唱指揮者モハイネー・カタニチ・マーリアの指揮で、2001年仙台と福島で、また、降矢美彌子の指揮でヘルシンキのシベリウス・アカデミーで全曲演奏を行っている。

福島コダーイ合唱団の2008年8月の『児童と女声のための合唱曲集』連続演奏会は、それらの集大成と言える渾身の演奏であった。本ライブDVDの特徴は、演奏だけを聴くこともできるが、訳詩を挿入した字幕入り演奏も収録したので、バルトークが愛した民謡の歌詞を理解しながら、ハンガリー語による原語演奏を聴くことができる点にある。

注文フォーム：

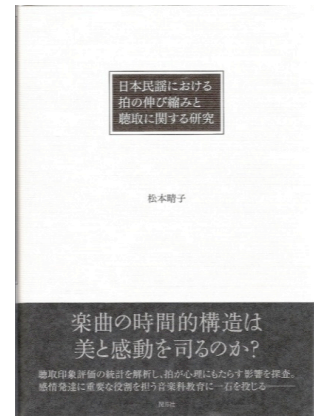
<http://www.interq.or.jp/www1/posta/fkc/dvdyoyaku.htm>

（降矢美彌子：帝京平成大学）

3-4 日本民謡における拍の伸び縮みと 聴取に関する研究

松本晴子著

関月社，2009年1月31日初版
全214ページ，4,800円＋税
ISBN: 978-4-904194-80-5



生成り色のカバーと黒色のオビに銀字で本書のメッセージが簡潔に紹介されたシックな装丁の本である。筆者は10数年の中学校教員の後、紆余曲折を経て現在大学で音楽教育の研究に携わっている。そのきっかけとなったのは、ふだんの授業のなかで音楽を愛好する心や感性が育ってきているように思われた生徒たちが、学期末に近づくと成績に結びつく音楽学習以外は意欲をなくしていることに疑問を覚えたからであった。苦慮している時に、人間の心身に及ぼす音楽の作用を活かした音楽療法の理念や方法に出会い影響を受けつつ多くを学び音楽の機能に着目した音楽科教育の理念や方法について今日まで研究を続けてきている。

本書は、日本民謡の特性と日本人の感性との関連性に着目し拍節的でない音楽を学習する意味を感情の発達という観点から考察を行ったものである。具体的には、日本民謡のなかから拍節的なタイプと拍節的でないタイプの曲を選出し、高校生(延べ1225名)へ聴取印象評価の調査を行った統計を解析している。

それぞれのタイプの民謡曲の表現特性を明らかにすることを基本にしながら、本書では感性の基となる感情の発達に注目し、感情が発達し成長していく過程には、生活のなかで自然に身に付いていく場合と学ぶことによって感情が育っていく場合があることを確認しつつ、音楽的感性の伸長には音楽科の役割が重要であることを述べている。また日本民謡を学習する機会や曲名などについても調査を行い資料として現在の状況をまとめている。

音楽を楽しむ、音楽を味わう、音楽的感性を育てるということに悩んだり考えたりしている音楽指導者、あるいは音楽関連の研究などに携わっている人たちに本書をお読みいただくことは、拍節的な曲の学習と同時に拍の伸び縮みを持つ曲を学習することの意義を再確認させるきっかけとなったり、発達(感情の発達)に応じた適切な教材について考えるきっかけとなってくれるであろう。

(松本晴子：宮城学院女子大学)

(付記：本書は東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科で受理された博士論文を宮城学院女子大学の出版助成金を受けて公刊したものである。)

4 事務局より

4-1 お知らせ

1) 第40回大会参加申し込み方法は、同封の「第40回大会参加申し込みについて」に掲載します。多数の皆様のご参加をお待ちしています。

2) 年会費未納の方には、「払込取扱票」を同封しますので、至急お振り込みください。

3) 住所変更された方は、学会事務局にFAXまたはEメールでお知らせください。

4) 学会ホームページをリニューアルしましたのでご覧ください。

「日本音楽教育学会ホームページ」<http://www.soc.nii.ac.jp/jmes2/>



……【編集後記】……

40回大会（広島大会）が近づいてきました。創立40周年の節目にふさわしい魅力的な企画が準備され、発表者数も過去最大となります。学会の発展を印象付けるすばらしい大会になることでしょう。

最近、記念誌の作成作業を通して、この10年の歩みを振り返る機会がありました。詳細は記念誌にゆずるとして、学会の発展の蔭には、その時々役員をはじめとする多くの会員の尽力があったことを、改めて実感することができました。

学会の発展に力を尽くしてくださった方々に思いをはせながら、会員のみなさん一人一人の力で40回大会を盛り上げていきたいものです。広島でお会いしましょう。

（津田正之、北山敦康）

……

＜平成 20～21 年度 日本音楽教育学会役員＞

会 長：吉田 孝

副 会 長：北山敦康

常任理事：齊藤忠彦（事務局長），嶋田由美・津田正之（総務），田中健次（会計）
小川昌文・杉江淑子・三村真弓（企画），八木正一（編集）

理 事：尾藤弥生（北海道），降矢美彌子（東北），佐野 靖・筒石賢昭
坪能由紀子・藤沢章彦・本多佐保美（関東），新山王政和（東海）
安田 寛（近畿），吉富功修（中国・四国），岩崎洋一（九州）

会計監事：奥 忍・今川恭子

事 務 局：亀山さやか・山本由紀子・徳山菜央・光平有希

＜日本音楽教育学会事務局＞

【事務局本部】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

日本音楽教育学会事務局

TEL&FAX 042-381-3562

E-mail onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

開局日：月・水・金 10:00～16:00

【事務局編集担当】

所在地：〒739-8524 広島県東広島市鏡山 1-1-1

広島大学大学院教育学研究科初等カリキュラム開発講座

榎藤研究室気付 日本音楽教育学会事務局〔編集担当〕

E-mail jmesedit@hiroshima-u.ac.jp